

# 八尾・よろず考古通信



八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌 年 2 回発行

## 平成 20 年度の主な発掘成果から

平成 20 年度、(財)八尾市文化財調査研究会では、17 件、面積にしておよそ 1,632 m<sup>2</sup> の発掘調査を実施しました。また、国庫補助事業に伴う遺構確認調査は 107 件にのぼります。

平成 20 年度の発掘調査は、調査面積が小規模なものが大半であったにもかかわらず、多くの重要な成果がありました。弥生時代では、弓削遺跡からほぼ完全な形の水差形土器(弥生時代中期)が出土しています。

また、寺院に関連した遺構・遺物が高麗寺跡、東郷廃寺、中田遺跡から出土しており、寺の存続時期や寺域を推定するうえで貴重な資料となりました。



本誌掲載調査地点位置図

## 発見 1

## 東郷ムラの最初の足跡

東郷遺跡<第 72 次調査>(光町二丁目)

東郷遺跡は、河内平野南部の長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地に位置する弥生時代中期以降の複合遺跡です。なかでも、古墳時代初頭～前期(3～4 世紀)にかけての集落域の拡大がみられ、当時の中心的な役割を果たした遺跡の一つであったと考えられています。

弥生時代中期の集落域を構成した遺構については、遺跡範囲南西部の第 15 次・第 49 次調査のほか、今回調査の第 72 次調査を含めて東西約 250m の間で散発的に分布が認められますが、時期的にも限定されていることから、短期間で小規模な集落であったと推定されます。なお、第 49 次調査からは、紀伊地方(和歌山県)から持ち込まれた搬入土器が出土しており、当時の地域間交流の一端が推定されます。



遺構検出状況

## 目次

- 20 年度の主な発掘調査インフォメーション(p 1～3)
- 考古学よろずコラム(p 4)
- 1. 東郷遺跡<第 72 次調査> 4. 高麗寺跡<2008-14> 跡部銅鐸について
- 2. 弓削遺跡<第 8 次調査> 5. 東郷廃寺<2008-96> ● イベント案内(p 4)
- 3. 東郷遺跡<第 71 次調査> 6. 中田遺跡<2008-378> ● 編集後記(p 4)



発見  
2

## 弥生土器、容姿極まる 完形の水差形土器が出土

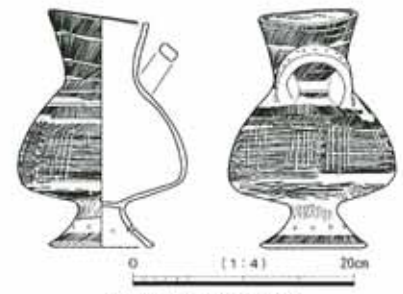
弓削遺跡<第8次調査>(志紀南町四丁目)

弓削遺跡は八尾市中南部に位置する弥生時代中期以降の複合遺跡です。旧大和川本流の長瀬川の左岸に位置しており、南部は柏原市の本郷遺跡(縄文時代晩期以降)と隣接しています。

第8次調査では、弥生時代中期の水差形土器・高杯等の弥生土器が見つかりました。中期のムラの範囲は、弓削遺跡南部から本郷遺跡の北部に広がっています。また、奈良時代の軒丸瓦が見つまっていることから、当時の主要街道であった渋河道(亀瀬越道)に近接した寺院等の建物が存在したことが推定されます。



水差形土器



水差形土器実測図

### 水差形土器

水等の液体を注ぐ容器。把手と反対側が高くその部分に注口が付けられています。

弥生時代中期後半の一時期のみ盛行した器種で、底部が平底と台付きのものがあります。弥生時代中期に特有な流水文や櫛描刺突文などの模様で加飾された完成度の高い華麗な土器で、作者のこだわりを感じます。

発見  
3

## 弥生時代後期から古墳時代前期のムラの跡を発見

東郷遺跡<第71次調査>(光町一丁目)

東郷遺跡は八尾市のほぼ中央に位置する弥生時代中期以降の複合遺跡です。

第71次調査では、弥生時代後期末(2世紀後半頃)の溝内からは同時期に捨てられたと思われる大量の弥生土器が見つかりました。

調査地の北西約100m地点で行われた第69次調査(北本町二丁目)においても、同様の性格を持つ溝が見つっています。溝に大量の土器を廃棄する行為は、弥生時代後期から末期にかけて、見られる行為で、ムラの引越しや、何らかのまつり(祭祀)があったものと推定されています。



弥生時代後期末の溝検出状況  
(底部に弥生土器が大量に廃棄された状況)

### 土器大量廃棄の謎

弥生時代後期から末期、このような土器を一括廃棄した溝が八尾市を中心とした中河内地域に多く見られます。このような土器の大量廃棄が随所で見られることは、この時期に頻繁に集落移動が行われていたことを示しています。ところで、中国の史書には、弥生時代後期後半にあたる「漢の宣帝の光和中(178~183年)」、倭で大乱があったと記されています。この時期、不安定な政治情勢を受けるかのように、生駒山地西麓部においても、岩滝山遺跡(東大阪市)、花岡山遺跡(八尾市)、平尾山遺跡・高尾山遺跡(柏原市)で「高地性集落」が成立しています。したがって、この時期に見られる土器の大量廃棄が「倭国乱」(2世紀後半)に関連した出来事であった可能性があります。

発見  
4

こまでらあと  
幻の古代寺院「高麗寺跡」

高麗寺跡<2008-14>(服部川二丁目)

高麗寺跡は、市域東部の生駒山地西麓部の服部川二丁目一帯に存在した古代寺院です。付近一帯に、「高麗(古来)」「堂ノ前」「堂ノ西」等の小字名が残り、古くに採取された瓦類から、創建時期は飛鳥時代中期(7世紀中葉)で、鎌倉時代(13世紀)まで続いた寺院と推定されています。なお、創建時には教興寺(教興寺六丁目)と同様、西琳寺(羽曳野市)式系軒丸瓦が使用されています。

今回の調査は、高麗寺跡推定範囲内で行われた初めての発掘調査で、柱穴や整地層の他、瓦類・土器が見つかりました。これらの調査成果は、高麗寺跡の寺院建物や伽藍配置を推定するうえで大変貴重な資料と言えます。



高麗寺跡の調査地(後方は生駒山地)



柱穴の検出状況

創建瓦  
〈飛鳥時代中期〉

発見  
5

とうごうはいじ  
飛鳥時代の寺院「東郷廃寺」

とうごうはいじ  
東郷廃寺<2008-96>(桜ヶ丘二丁目)

東郷廃寺は、平成3(1991)年に桜ヶ丘二丁目地内で市教委による調査で多量の瓦類が見つかったことから寺院の存在が推定され、「東郷廃寺」と名付けられました。また、それ以前の昭和62・63(1987・1988)年の大阪府教育委員会による楠根川改修工事に伴う調査でも、多量の瓦類が見つっています。現時点では、お寺の主要建物跡が見つかっておらず、伽藍配置等は不明です。これまでの調査で見つかった瓦類から、飛鳥時代中期～鎌倉時代の寺院であったと推定されています。創建時(飛鳥時代中期)の軒丸瓦には原山廃寺(柏原市)系の瓦が使用されています。



平瓦出土状況

創建瓦〈飛鳥時代後期〉

発見  
6

平安時代の寺跡を発見

なかつた  
中田遺跡<2008-378>(中田四丁目)

分譲住宅の人孔部分を対象として、3箇所で調査を行いました。調査面積が18㎡程度の小規模調査ですが、東西方向に延びる溝(幅2.2m、深さ30cm、長さ13m以上)と南北方向に延びる溝(幅50cm以上、深さ15cm、長さ2m以上)が見つかりました。溝内から、多くの瓦類が見つっています。調査地の字名が「寺ノ内」であることから、瓦類は寺院に伴うもので、溝は寺域を区画する区画溝であった可能性があります。出土遺物から、平安時代後期に創建され室町時代中期に廃絶した寺院であったと推定されます。近接する位置にある善坊寺(中田四丁目)の旧寺域であった可能性があります。



(上)蓮華文軒丸瓦・(下)唐草文軒平瓦  
〈平安時代後期〉

**あしべ 跡部銅鐸** (市指定文化財 流水紋銅鐸, 跡部遺跡出土)

跡部銅鐸は、平成元年10月に八尾市春日町一丁目で行われた公共下水道工事に伴う発掘調査で発見されました。一辺1.27m、深さ0.5mを測る隅丸方形の埋納坑の中央部よりやや南西位置に鈕の先端を南東部に向け、鱗を横にして突き刺す形で埋められていました。

鈕の形や鐸身の文様から扁平鈕式の一區流水紋に分類されるもので、全長46.65cm、鈕高13.65cm、裾幅30.4cm、厚さ2.5~5mm、重さ4.7kgを測ります。各部分の文様は、鈕部分が双頭渦文の3個の飾耳と外縁外側が鋸歯文、外縁内側が連続渦文、菱環部分に綾杉文が配されています。鱗部分は、上・中・下の三箇所に飾耳があり、その間の上段・中段にA面(表面)4個・B面(裏面)3個、下段にはA・B面共に2個に鋸歯文が配されています。鐸身部分の流水紋は、A面が比較的良好ですが、B面は湯回り不良のため補鑄された後、文様を補刻された部分が認められます。

銅鐸の形式から、弥生時代中期後半(約2000年前)に鑄造され、弥生時代後期末(1800年前)までには埋納されたものと推定されます。八尾市内からは、生駒山西麓部の恩智地区の垣内山で流水紋銅鐸、同じく都塚山で袈裟襷紋銅鐸が出土している他、亀井遺跡から銅鐸片2点が出土しています。

銅鐸は、稲作文化の波及とともに西日本を中心に稲作祭祀の中心的な役割を果たした弥生時代を代表する遺物で、全国で約600点が出土しています。形はつりがね形で、木に吊下げて内部にぶら下げた舌(棒)を振り動かし内面の突帯に当て音を出す「カネ」で、初期のものは20cm程度、最も新しいものは1mを超える大型に変化しています。このことから、祭りの道具として「鳴らす」ことから「見る」ことに変化したものと推定されています。製作期間は弥生時代前期後半から弥生時代後期前半で、以後は祭祀形態の変化で使用されなくなり、壊されたり地中に埋納されたりしました。跡部銅鐸のように発掘調査で検出された例は10例程度で、埋納位置・埋納方法・埋納時期等の多くのデータは、弥生人の精神文化や弥生時代から古墳時代への祭祀形態の変化を知る手がかりを与えています。



跡部銅鐸 (A面-表面)

**展示予告** 平成21年度秋季企画展「やおの中世一村々の成立とくらしー」

日時：平成21(2009)年9月30日(水)~平成22(2010)年2月26日(金)

場所：八尾市立埋蔵文化財調査センター  
八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX072-994-4700

時間：9:00~17:00(入館は16:30まで)

**関連講演会**

日時：①平成21年10月11日(日)「やおの中世考古学」原田昌則((財)八尾市文化財調査研究会)  
②平成21年11月15日(日)「中世遺物からみた八尾」成海佳子((財)八尾市文化財調査研究会)

時間：13:30~15:00(13:00より受付) 当日先着30名 資料代200円

お問い合わせ：八尾市立埋蔵文化財調査センター TEL・FAX072-994-4700

**編集後記**

来年の平成22(2010)年は、平城遷都1300年の節目の年である。数多くの記念イベントが予定され、様々な宣伝媒体を通じて広範に人々に周知されている。ところで、奈良時代後期の神護景雲三年(769)十月三十日から翌年宝亀元年(770)八月二十六日の僅か十ヶ月間、現在の八尾市南東部の東弓削に「西京」と言う都が造営されたことを知る人は果たしてどれだけいるのであろうか？ その「西京」が今年10月、遷都1240年の小さな節目を迎える。因みに来年が廃都1240年にあたるが、いまのところイベントの予定は聞かない。〈MH〉